横浜医学，61，83-87（2010）

原　著

進行食道癌に対する術前化学療法を含む集学的治療の成績

南出純二，森脇良太，米山克也，
青山法夫，小泉博義
神奈川県立がんセンター 消化器外科（食道）

要　旨：進行食道癌では不可視の癌病巣が切除範囲外へ比較的高い確率で転移している．この転移病巣を消去すれば予後は向上する．その可能性がある治療は化学療法であり，化学療法は感受性のある症例に必要な回数を投与されることで効果を発揮する．進行食道癌に対し切除範囲外の病巣治療を目指し，術前化学療法の直接効果で有効症例を選択し化学療法を追加する集学的治療を計画した．1991年9月より1999年12月まで，画像上切除可能と診断された進行胸部食道扁平上皮癌症例53例において，CDDP＋5FU 療法をまず1コース施行し，画像診断で NC となった症例では1コース終了後手術した．PR となった症例では2コース目を施行してから手術した．病理組織学的効果判定にて Grade1b 以上の効果を認めた症例には2コースの術後化学療法を追加施行した．従来の手術単独治療の成績と比較するためには病理組織学的に治療前進行度を決定する必要がある．本集学的治療における治療前進行度 pStage Ⅲの5年生存率は57%であった．手術単独治療では40%前後とされている．病理組織学的直接効果が高いと予後は向上しており関連性を認める．本集学的治療は pStage Ⅲ症例において治療成績が高く無効症例で予後の低下を認めない．有害事象は許容範囲内であり，遂行率も高く化学療法による予後の改善が充分に望める．期間はやや長いが標準的に施行可能と考えられた．

Key words:　進行食道癌，シスプラチン，5-フルオロウラシル，術前化学療法，集学的治療